

広野文芸欄

季題 当季自由句

広野町臯月句会

阿部 真生
早春の朝の散歩に汗ばんで
春間近かたんぼに煙立ちにけり
春潮の高波白く濁りけり

鯨岡 正子

陽照りて桜のつぼみ赤み頃
夜やみに恋猫さわぎ賑やかに
浅見川さらさら流れ花七分

西山子

春光や点滴瓶の透きとほる
至福なる時は短し花の山
送列のバスにすわれる春の雨

宮下 純子

さくら祭りほほえみおとりて猿田彦
若きらの髪なびかせて春の街
里の灯の点々として花こぶし

塩 史子

花の下老若男女顔そろう
花冷えや旧交温む五人旅
還暦の担ぐ御輿や春を呼ぶ

酒井 津祢

添えくるる子の手は温し花の下
初蛙ふさぐ心のはずみけり
やぶれ傘吾が存在をしめしけり

山田 基星

初つばめ狭庭にひくく飛びにけり
孫と行く五月の風の畦の道
清明の息吹の見える五社の峯

根本 山水

廻り来る午后の日差しに笹子鳴く
夕顔の花を夫婦で見ておりぬ
夜行終え初音背中に帰りけり

広野みなづき短歌会五月詠草

(旧仮名使用 五十音順)

金婚を祝ひて旅に出る前夜眠れず夜半の
長さを覚ゆ
五十年過ぎし年月夫と行く窓に眺むる万
朶のさくら
落慶の記念の参拝なして帰る車中に吾も
心安らぐ
猪狩ユリ子

嵐去り空群青に晴れたれば燕すいすいと
目交ひをとぶ
良き日和バスに遠来て湯の宿にくつろぎ
につつ短歌を学ぶ
菅原 泰郎

萌え出づるけやきの緑きわだちて静かに
ぞ降る暁の雨
さわやかに吹き入る風が顔なでて昼寝の
我が極楽気分
田副 耕一

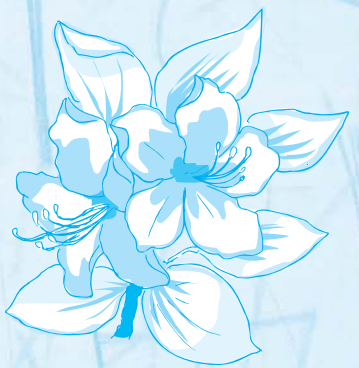
何くれと庇護してくれたる我が兄に感謝の
心何に記さん
七月のくれば七十となる吾か問ひかける
ような父の肖像
小澤 健次

満開のほげに心は移りゆき歌会一の次ぎ
吾は罪びと
孫五人充電補給の如く来て吾が家の五月
まさに賑やか
新田 里子

共どもに歌を愛して集ひたる誰の笑顔も
和む春いろ
断崖は八潮つつじに占められて副画一服
仰ぐが如し
「咲きて良し散るもまた良し桜かな」思はず
発す俳句まがひを
木村ミヨ子

還暦となりし吾が身をしみじみと思ひて
更くる夜半を覚めをり
友の来て酒汲み交はしつつ思ふ先祖の供
養をせねばならぬと
藤田 孝夫

山桜つつじ連翹競ひ咲く一山豊けき吟
行の宿
老ひ達の見守り隊より少数の下校の児ら
は田中の道行く
レンゲ摘み置きし鞆を探したる遠き日想
ひ児らを見守る
山内 洋子
心かわく事多かりし冬すぎて和み親しむ
山の湯宿に
平凡に生き来し一世平凡に詠みて友らと
たのしむひと日
友ありて共に老残をすこやかに短歌に寄
りて心たのしむ
父母の歳越えて生きある身はいづれ悲し
み多し喜びよりも
知らぬこと忘るる事の増えしのみ去年よ
り今年につながらりしもの
わが片辺音なく過ぎてゆくものを日月と
知れどせむすべもなき
吉兆か凶兆かしらず前土手の一本松に来
啼く鴉あり
道に逢ひ僅か話ししのみなるにその言葉
長くわれをあたたまむ
山口 歌子



遠藤健太郎

部屋中の配置変えする夏立つ日
郷に在り一本太き山桜
祝い膳待つ間のお茶と柏餅

鯨岡 一生

さより釣る浮子一点に散りやすく
ぜんまいの残りているは雄ばかり
蜜蜂のうなる羽音や椿の木